東方百目鬼

飛び交うマヨビーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方百目鬼

【Ｎコード】
Ｎ８８３２Ｙ

【作者名】
飛び交うマヨビーム

【あらすじ】
初投稿です。これは外来人でもない、人間でもない幻想郷の住人である妖怪『百目』が悪戦苦闘しながらも必死に生き抜く物語。

序章、いわゆるプロローグ（前書き）

はじめまして、飛び交うマヨビームです。
今回この作品が初投稿です。
思いつきで書き始めたので、いろいろと不安がありますが、頑張ろうと思います。
よろしくお願いします。
ではどうぞ。

序章、いわゆるプロローグ

～side　龍神～

幻想郷。それは幻想となった者が流れ着く場所。
人間や妖怪、さらには神がそこで暮らしている。
季節は夏。細かく言うなら梅雨の時期。
何時もの様に、幻想郷を視察する。
見たところ、今はなにも起こってないようだ。
ふと、妖怪の山の方へ見る。
妖怪の山には少しではあるが、気になる存在がいる。彼だ。
その存在は妖怪『百目』。名前の通り、身体に複数の目がある。
だが彼にはそのような物は見当たらない。どうやら顔の２つ以外の目は全て閉じているらしい。
それに、容姿は完全に人間なので、彼を人間だと思い込む者も少なくない。
当の彼は、その事に関して便利なのか不便なのか曖昧なようだ。
もう少し、彼を見てみるか。

生れ付き幻想の最後の１人を。

第1話　嘘つきいっくんと砕けたあやちゃん（前書き）

飛び交うマヨビームです。
サブタイトルはこんな感じでパロディさせようと思います。
本編との関係はほんの少しだけです。

第1話　嘘つきいっくんと砕けたあやちゃん

～ｓｉｄｅ　妖怪『百目』～

・・・ジメジメする。
此処、妖怪の山はただいま季節限定で絶賛梅雨の真っ最中で蒸し暑くなっている。
多分、此処以外の所にもそのような事になっているだろう。
何故多分なのかと言うと、幼い頃以来外に出てないから。箱入りである。
なら幼い頃のことは憶えているのかと言うと、答えはＹＥＳだ。
憶えてはいるが、その時に起こった事件の方が強く記憶に残っている。
目の前で俺を除く家族や他の百目一族が皆殺しにされたあの日。
俺は独りになった。閑話休題。
　今俺は、食料を集める為に山でうろついている。
茸と木の実、それに先程狩った猪が今回集めた結果だ。
それを自分の小屋に運ぶ。猪の足を片手で持って引きずり、もう片方の手と胸元で茸と木の実を持ち抱える。
しばらく歩くと、小屋が見えてきた。木で出来た簡単な小屋だ。
この辺りは茂みが多く、隠れて住むのに外せない所だ。特に俺みたいな訳有りな奴に。
小屋の扉まで行っ「あやや、こんなとこに人間なんて珍しいですね・・・」死ぬかと思った。
振り返り、声の主を見る。

「久しいですね、文さん」

「そう言ってる君はいつぞやの百目クンじゃない」

射命丸文と奇跡の再会みたいな。

「“あれ”から何回か会ったけど、随分大きくなったわね。一樹クン」

“あれ”とは先程言った事件のことで、一樹は俺の名前だ。姓は七目である。

「最後に会ったのは半年前なのに、そんなに変わります？それともう子供じゃないんだからクン付けはやめて欲しいんですけど」

あと5年で立派な妖怪になるというのに、何時までも子供扱いだと恥ずかしい。

それに見た目だって（自分で言うのも何だが）人間の青年に似ている。それの所為で人間と勘違いされることが多いが。

「私から見れば、君は何時まで経っても子供よ。それに、妖怪は精神に依存してるから半年で成長なんて呼吸するぐらい当たり前の事。それでも君は子供のままだけど」

2回も言われた。地味に傷付く。

「それで、今日は何か御用なんですか？」

「あ、そうそう。一樹クンに朗報があって」

「朗報？」

「そ。もう少ししたら元服だし、家族がいなくて生活に困っている

だろうから寝床はやれないけど、私の新聞のお手伝いしたらそれ相応の報酬はくれるって大天狗様が許可してくれたの」

これは確かに朗報だ。それを引き受ければもう1日中山の中をうろつく事はない。
それに山の外へ出掛ける事が出来る。種族は百目でも、顔の2つ以外の目を瞑っていれば問題ない。
とは言っても、普段からそうしている訳なのだが。妖力と身の安全の関係で。

「わかりました。じゃあ何時からそれをすればいいですか？」

「決まっているじゃない。今すぐよ」

「その前にお昼にしませんか？」

「んー。まだ食べてないし、そうしようかしら」

「じゃあ、中へどうぞ。料理は俺が作ります」

「期待してるわよ」

こうして俺たちは小屋へ入っていった。
ちなみに此処までの“場面”は予め妖怪『百目』としての能力で『視て』、知っていた。
よって先程の死ぬかと思ったは半分嘘になる。かと言って驚かない訳ではない。後ろから話し掛けると大体はそうなる。閑話休題。
さて、此処まで来たという事は――――

そろそろ動いていい頃合いかな。

第1話　嘘つきいっくんと砕けたあやちゃん（後書き）

感想・意見があったらお願いします。

七目一樹の赤面（前書き）

昨日はすみませんした。
更新するの忘れていて・・・。
初っ端からこんなので大丈夫かと思われるようですが、
大丈夫です、問題ありません。

七目一樹の赤面

〜side　一樹〜

「「ごちそうさま」」

あ、ダブった。

と思いながら食器を片付けているのは、俺こと七目一樹である。
一方、椅子に座り食後のお茶を飲んでいるのは射命丸文。
つい先程、昼食を食べ終わった所な訳で今の状況に至る。
ちなみに今日の昼食の献立は、文さんから貰ったお米で炊いたご飯と狩ってきたばかりの猪の生姜焼き、ついでに豆腐の味噌汁だった。
作ったのは俺である。箱入りでも料理できるんだからな。
この小屋にはかまどがあって、それで工夫しながら料理を作っている。
ただ、かまどなので炊いたり煮るのは問題なく出来ても、焼くなどといったものは一度釜を外し、鉄板を取り付けなければならない。
まあ慣れてるが。

「これ飲み終わったら行くわよ」

「わかりました」

今日は文さんの職場で新聞のお手伝いがある。
そこで働くという事は、あの大天狗さんはある程度俺を許してくれている、という事になる。

――誇り高き天狗一族が『今は亡き幻想の骸(むくろ)』を保護する訳には

いかない――、か。
それでも文さんは、俺なんかのために必死で大天狗さんに頼んだ。ならバレないように保護をすればいい、勿論自分が受け持つ、と言ったものの、山のトップである天魔様にバレたらなにをされるかわかったものじゃない、と返され文さんは諦める事しかできなかった。だが、代わりとして小屋と食料ならなんとか出来ると言われ、俺と文さんは安堵の息をついた。
俺から見て、文さんと大天狗さんは恩人だ。特に文さんは姉のような存在で、とても頭が上がらない。
一旦、脳内時間旅行を中断させ文さんの方を見る。丁度湯呑みの中身を飲み干した所らしく、外に出る準備をしている。食器の片付けはとっくに終わっていたので、俺も準備をする。とはいっても、仕込み杖を細い帯で腰に巻き付けるだけなんだが。

「じゃ、行こうか」

「はい」

短く返事を済ませ、小屋を出る。続いて文さんも出てくる。戸を閉めて文さんと歩き出す。文さんの職場は此処から歩いて5分の所にあるので、そこを目指す。職場と言っても、屋敷だから家でもあるんだろうけど。
それにしても、文さんと横に並んで歩くのは久しぶりだな。幼い頃以来だ。半年前は現状報告と食料の調達を済ませてからすぐに帰っていってしまった。幼い頃の懐かしさが滲み出てくるのを感じる。

ついでに胸の鼓動が速くなるのも。これは俺がそういう年頃だから仕方ないとして。

～side　文～

しばらく歩くと、私たち烏天狗が住んでいる屋敷が見えてきた。

「見えてきましたね」

「取り合えず着いたら、先に大天狗様のとこに行くわよ」

「はい」

・・・やっぱり違和感あるなぁ。

一樹が小さかった頃は文お姉ちゃんって甘えてたのに、今では他人行儀。あの頃は可愛かったのになぁ。

「ねえ一樹」

「はい、文さん」

しかもさん付けだし。

「その他人行儀みたいなの、やめてほしいんだけど。寧ろ前みたいに甘えていいのよ？」

「遠慮します。それに、恩人にそんなことはd「出来ないというか、頭が上がらないだけでしょ」はい・・・」

「全く、そんな事はいいって言ってるのに。いい？これから私の事は呼び捨てで呼んで、タメ口で話す事。異論は受け付けないから」

「でm「異論は受け付けない」・・・わかったよ」

おっ、ついに砕けた。って思ったら、一樹の顔が赤くなった。「どしたの」「・・・なんでも」「ふーん」

顔を覗き込んだら逸らされた。よく考えたら一樹はそういう年頃なんだっけ。私のメロメロボディーにヤられたんだな、きっと。

気がついたら目の前には屋敷の玄関まで来ていた。一樹を見ると真剣な顔つきで立っていた。しかし緊張しているためか、何処かぎこちない。大天狗様に会うんだもんね、緊張するに決まっている。・・・でも。

でも大丈夫だからね。

「私がいるから」

――私が傍にいるから――

七目一樹の赤面（後書き）

射命丸文の口調を原作を意識して書いてみました。
あれ、崩れてないか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8832y/

東方百目鬼

2011年12月11日17時45分発行